論点

世界史 国境越えた研究必要

羽田（はねだ） 正（まさし）氏
東京大学東洋文化研究所教授。専門はグローバルヒストリーの方法による世界史。著書に「新しい世界史へ」など。62歳。

2015年11月のパリ同時テロは、グローバル化の一つの側面を私たちに示した。一言でいえば、国と国境が絶対のものでなくなっている。同時にこの事件は、世界史の見方の刷新を私たちに強く迫っている。

フランスやベルギー国籍の若者が、自分が生まれ育った社会の様々な矛盾に不満を抱いてパリで事件を起こしたという意味で、これはフランスやベルギーの国内問題であるはずだ。

だが、仏大統領が「戦争」を宣言し、仏軍がシリアにある「イスラム国」拠点に対する空爆を有志連合と共に実行した時点で、事件はグローバル化している。「イスラム国」の過激思想に染まり、その訓練を受けていた者たちとはいえ、自国民が自国で起こした事件の報復として、他国の領域で「国」を称する集団への攻撃が行われたからだ。

このようなグローバル化、すなわち国と国境の相対化は、現代的な現象のようにみえるがそうではない。現場に違いはあるにせよ紀元前から、ユーラシア・アフリカの広範囲で、必ずしも国とは関係なく交易が活発に行われていた。宗教や技術、学芸などの文化は国を越えて異なる人間集団間で相互に影響を与え合い、各地で特徴のある展開を遂げてきた。

世界は昔から「グローバル化」していた。人類史の中で、国境の内と外を明確に区分し、国を単位にものを考える20世紀の国民国家の時代がむしろ例外なのだ。

昨年のパリ同時テロ事件は後世、どのような枠組みで歴史として記されるのだろう。フランス史やヨーロッパ史として書けないことはないだろうが、事件の全容を描きだすのに最もふさわしい枠組みが、世界を一つの単位とする世界史であることは間違いない。

これまで私たちは、世界を国単位に解体したうえ、その過去を別々に理解し、それらを寄せ合わせて世界史とみなしてきた。しかし、そのような世界史は20世紀に特有のものだ。これからは世界を枠組みとし、様々な視点から人類の過去を総合的に探求する方法で、現代にふさわしい、新しい世界史の解釈と理解を生み出してゆかねばならない。その方法論がグローバルヒストリーである。

例えば、明治維新は日本にだけ生じた独特の政治・社会改革だろうか。19世紀の世界各地で連なるように生じた「革命」の一つとみることはできないだろうか。日露戦争や韓国併合は、アジアの「小国」日本による例外的な行動だろうか。「大国」である帝国主義諸国の行動とどのように異なるのだろう。

世界全体でグローバル化が進む一方、東アジアではなぜ歴史認識をめぐる国同士の争いが激しくなっているのだろう。日中韓と西欧では、「国」とその歴史についての見方がかなり異なっているように思える。

グローバルヒストリーの方法でこうした問題に取り組むことで、日本と世界の過去は確実に従来と異なって見えてくる。私たちの現在の立ち位置と進むべき方向を知るために、研究の本格始動が急務である。

出典：2016年1月22日付朝刊
読売新聞「論点」

〒100-8055 [illegible] kaisetsu@yomiuri.com